

熊本地震における埼玉県立大学学生のボランティア活動 活動報告書

活動場所：西原村復興支援災害ボランティアセンター

期間：2016年9月13日～30日

2016年11月21日

活動報告会資料

I 学生ボランティア支援の趣旨と概要

社会福祉子ども学科教員 新井利民

学生ボランティア支援の趣旨と経緯

2016年4月14日及びそれ以降に発生した「熊本地震」については、様々な被害が発生し、被災地での支援活動も行われてきたところであるが、未だ避難生活を送る方もおり、住宅の家財や周辺のがれき撤去などの支援を必要としている方々も依然存在する。一方で、現地在住の支援関係者は通常業務と併せて被災者支援活動やボランティア受け入れ業務なども行っており、休みが取れないことも多く、うつなどの症状が出てしまっているという報道もあった。全国社会福祉協議会やNPOなどの外部からの支援も、7月をめどに撤収する予定も示されていた。

今回の学生ボランティア支援を企画した新井は、「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議」（中央共同募金会等が事務局となっている被災地支援の全国組織）のメンバーである「さいたま災害ボランティアネットワーク」の日野泰宏氏とともに、5月1日～5月4日に熊本県に出向き、熊本県社会福祉協議会、熊本市社会福祉協議会、阿蘇郡西原町などを訪問したのちに、大津町社会福祉協議会災害ボランティアセンターにてボランティアセンターの運営支援活動を行った。その縁もあり、日野氏・社会福祉法人西原村社会福祉協議会とともに、夏休み期間中のボランティアセンターの運営支援や被災者への具体的なボランティア活動に関して、学生の支援を得る活動スキームを構想した。

学内メールにて呼びかけたところ、約20名の学生から問い合わせがあり、最終的に交通費もかかることから、7名の学生が参加登録した。

参加日程と学生

クール	日程	所属 名前
第1クール	9月13日（火）～17日（土）	社会福祉子ども学科 1年 川上藍美
第2クール	9月18日（日）～23日（金）	社会福祉子ども学科 2年 東憧夢
第3クール	9月21日（水）～26日（月）	看護学科 3年 田澤志帆
		社会福祉子ども学科 3年 川口絢子
第4クール	9月26日（月）～30日（金）	看護学科 3年 土井希実
		看護学科 3年 市石 遼
		社会福祉子ども学科 2年 深谷江里

*第1クールの9月13日（火）～15日（木）の日程で、教員の新井も参加。

主な活動

- ボランティアセンター運營業務：ニーズ受付電話／ニーズ票記入／ボランティア受け入れのための周辺業務／データ入力・集計 など
- 家財の搬出・破棄物のトラック積み下ろし
- デイサービスセンターでの活動 障害者福祉施設（NPO 法人西原たんぼぼハウス）での活動

宿泊先

西原村社会福祉協議会 デイサービスセンターのぎく荘。

*一部社会福祉協議会職員宅に民泊させていただいた。

成果

学生は以下の点を学ぶことができたと考えられる。

- 災害被害支援の継続性の必要性や、ニーズの変化などについて学ぶことができた。
- 災害ボランティアセンターの運営についてその一端を知ることができた。
- ボランティアやボランティア活動支援にかかわる人々の考え方などに触れることができた。



謝辞

今回、このような活動の機会を調整して下さった、さいたま災害ボランティアネットワークの日野泰宏様、学生の受け入れや宿泊場所などの調整をして下さった社会福祉法人西原村社会福祉協議会の皆様、日々の活動を支援してくださった西原村復興支援災害ボランティアセンターのスタッフの皆様、そして関係するすべての皆様に、深く御礼申し上げます。

なお、今回の学生の活動に際しては、萱場副学長、朝日教育開発センター長よりカンパをいただきました。こちらでも深く御礼申し上げます。

II. 参加学生の感想

【社会福祉子ども学科社会福祉学専攻1年 川上藍美】

はじめに

今回の西原村でのボランティア活動は、私にとって初めての災害被災地の復興支援に携わる機会であった。5日間という非常に短い期間であったが、真摯な姿勢で活動に取り組み、今後ボランティア活動に参加する際にも活かすべき多くの学びと反省点を見出すことにも繋がったと考える。

活動に関して

西原村での活動全体を通して、自分なりに精一杯の力で取り組むことができたと感じる。マッピング作業やデータ処理、電話対応、現場での片付け作業など初めての経験に苦心する場面も多かったが、地域やボランティアセンターの方々にご指導を頂きながらすすめていった。スタッフの方々はその日の状況に応じ臨機応変に活動しており、毎日の目まぐるしさや多忙さが伝わった。そのような環境の中、活動に参加させて頂いたのだから、自分も受け身になることなく、自発的に考え、行動することができればなお良かったのではないかと考える。

また地元住民の方々や全国各地から参加しているボランティアスタッフの方々まで、多くの方との関わり合いを大切に過ごすことができた。これほどまでに多様な経歴や志を持った方々と協働したことは初めてで、活動にかける思いや自身の生活・価値観についてなど非常に濃厚な意見やお話に触れることとなった。反対に自分の考えを聞いて頂き、意見を深めることもあった。それぞれの懸命な意思が寄り集まって復興のために邁進する雰囲気、それ故の利点や困難さなど、中身のある交流ができたからこそこの気づきも多かったように感じる。

反省点

私個人の反省として、事前の情報収集や学習が不足していたことが挙げられる。

まず活動場所である西原村について、地図上の大まかな位置や交通アクセスなどは調べていたものの、地理や土地柄、震災の被害状況や復興の状態などについてほとんど知らないまま現地での活動に入ってしまった。活動中、地域での充実したボランティア活動のために現場について理解を深めようとする姿勢が重要であることに気づき、準備段階での不備を悔いる結果となってしまった。

ボランティアセンターについても同様であり、センターの概要、活動内容、スタッフの方々の構成などほとんど知らず、現地でもたつく原因となった。今回お世話になったボランティアセンター以外にも目的に合わせたボランティア団体が複数活動していることなども含め、基本的な情報や知識を蓄えてから活動に臨むべきであった。

【社会福祉子ども学科社会福祉学専攻2年 東 憧夢】

熊本県西原村災害ボランティアセンターでの活動報告

はじめに

私は今年の夏の9月18日から23日までの計6日間、熊本県西原村の災害ボランティアセンターにおいてボランティア活動を行った。今回、その活動から学んだ、被災地の現状やそこで行われている活動、今後に向けた課題などについてまとめ、報告する。

熊本県の現状

私が熊本を訪れたのは、先ほども述べたように2016年の9月で、大地震からすでにおよそ5か月が経過していた。しかし、家が潰れていたり、石垣が崩れていたり、ブルーシートで屋根を覆われた家屋があつたりと、まだまだ復旧の途中だという印象を受けた。地震から日が経ち、テレビなどで熊本の現状が報道されなくなってきた今も、多くの人々が不安と隣り合わせの生活を送っている、支援を必要としているということは忘れてはならないことだと感じた。

災害ボランティアセンターでの活動内容

今回は実際に私たち学生がボランティアに向かうというよりも、災害ボランティアセンター運営の支援という形でのボランティア活動となった。主な活動内容は、被災者からのニーズ（ボランティアにしてほしいことの依頼）の受付、土日祝日のボランティア受付、交通に関するものをはじめとした書類の整理などであった。基本がニーズ受付で、臨機応変に災害ボランティアセンターでの業務の一部をさせていただくことができた。

活動を通して学んだこと・考えたこと

今回、私が西原村で活動をする中で、特にボランティアセンター内で話題になっていたことで気になった点がある。それはボランティア活動の線引きについてだ。どこまでのことをボランティアに依頼し、どこまでのことをニーズとして受け付けるのかというものだ。一例として、重機を使い効率を優先するのか、安全を優先し軽トラなど手作業をするのかという話し合いがあった。ボランティアセンターはどんなことでも依頼者とボランティアをつなぐ何でも屋のような存在なのではなく、ボランティアに対しても敬意を払いつつ、慎重に活動を行わなければならないのだと分かった。

【社会福祉子ども学科社会福祉学専攻2年 深谷江里】

私が中学1年生の時、2011年の東北の震災が起きました。その時に被災地で支援がしたいと思っていたのですが、時間やお金の都合上、行動に移すことができないまま気づいたら、大学二年生になってしまいました。そんな時に、新井先生から熊本のボランティア募集の連絡を見て、こんな機会は二度とないと思い参加することを決めました。

私は行く前にあまり熊本の現状を把握することができていなかったため、知識がないままに熊本に向かうことになってしまいました。今思えば、事前学習をしてから現地に向かうべきだったと後悔しています。しかし、知識がない状態でも、現地で学ぶことはたくさんありました。私は熊本では、外に出て作業をするボランティアをずっと思っていたのですが、実際は災害ボランティアセンターの運営のお手伝いでした。主に電話対応や、FAXを送るといった仕事でした。電話はボランティアを要請したい方や、ボランティアに参加したい方からのものが多かったです。普段あまり電話に出ることもないので電話が鳴るたびに緊張しながら対応をしました。いくつかの電話に対応して感じたのは、まだまだニーズがあるということです。東北の地震よりもニュースなどで取り上げられることが少なかった熊本ですが、解体しなければいけない家はたくさんあるけれど、様々な事情により手を付けることができていない建物もたくさんあるように見受けられました。また、ボラセンの方のご厚意で、西原村を車で案内していただきました。仮設住宅や、避難所、一般の住宅、解体待ちの建物、さら地にした土地、倒れたままの木や電柱…はじめて被災地を訪問した私にとって、衝撃的なものばかりでした。現地の方も、いつになったら元の風景に戻るのか、さら地にした土地をどうすればいいのか、など不安が絶えないのではないのでしょうか。そんな人々のために、ボランティアとしてきた自分には何ができるのか考えましたが、答えは出ませんでした。

私は今回の熊本ボランティアに心から参加してよかったと思います。様々なことを学ぶことができたと同時に、現地の方々と交流することもできました。方言に戸惑いながらも、様々なお話を聞くことができてよかったです。今回の訪問では、本当にたくさんの方にお世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。この5日間で見聞きしたことや学んだことは、一人でも多くの人に伝えていきたいと思っています。そして、少しでも多くの人に熊本のことを考えてもらい、熊本地震の記憶が廃れないことを願っています。頻繁に訪れることはできないけど、これからも遠くから熊本のことは応援していきます。

【社会福祉子ども学科社会福祉学専攻3年 川口 絢子】

私は、9月21日から26日まで熊本県阿蘇郡西原村の災害ボランティアセンターにてセンター運営のボランティア活動を行った。活動内容としては、主に電話で地域住民からのニーズを聞き取ることや、PCでの資料作成、資料整理などを行なった。将来、社会福祉士などとして働く可能性がある私にとって、とても有意義な経験となった。以下に、ボランティア活動を通して学んだことや感じたことを記述する。

・災害ボランティアセンターの運営について

私は今回、初めて、被災地の災害ボランティアセンターを実際に体感した。活動を行いながら学んだことの1つは、発災後ボランティアセンターが開設されてから、全国の社会福祉協議会や支援団体が決められたタームで交代してセンター運営に関わっていたことである。社会福祉協議会が災害対応を行うというのは授業などで聞いたことがあったが、復興の段階に合わせて全国のブロックごとに支援を行なっているということ、資料整理や伺ったお話などから学ぶことができた。支援体制の仕組みを学ぶことができた一方、次々と支援者が変わっていつてしまうことで、開設からの運営に状況などを一貫して把握することができる人が存在せず、情報の整理や共有、伝達の面で課題があり、なにか改善できる方法はないか考えさせられる点でもあった。

・支援物資への工夫について

これは、あとで返却の可能性のあるものを被災地に貸し出すときは、細かな部品ひとつひとつにもラベルなどで貸し出した支援側の情報を書いておくと、運営側の負担が減るのではないかとということだ。実際に、支援団体から貸し出されていた携帯電話などを返却するために借りたものが揃っているか確認していたときに感じたことである。携帯電話本体にはラベルなどが貼られており、判別が可能であったが、コードや端子の変換アダプターなどは何もなく、どれがどの支援団体からのものなのか正確な判別は難しかったためだ。些細なことかもしれないが、支援する側ができる少しの工夫で、把握しやすくなり、運営側の負担を少しでも減らすことができるのではないかと感じた。

・発災からのニーズの変化について

活動中、これまでのニーズを月ごとに集計し、ニーズごとの変化を見ることができた。発災後は家の中の割れた食器などの片付けなどが多いが、だんだんと仮設住宅などへの転居や公費解体が進むにつれ、家財道具の運び出しなどのニーズに移っていく変化が感じられた。また、台風への対応として、8月9日は屋根のブルーシート張り・張り替えが多かったのも印象的であった。復興の段階や時期などと共にニーズが変化することは頭では理解していたつもりではあったが、改めて再認識した出来事であった。復興の段階にあわせてニーズの傾向を把握し、支援の体制を整えることは運営側にとって大切であると考えられるため、もし私がそのような立場になったら意識したいと強く感じた。

【看護学科3年 田澤 志帆】

私は、今回9月21日から9月26日までの6日間、熊本県の西原村復興支援災害ボランティアセンターで運営のお手伝いをしてきました。まず初日に私が熊本県に到着してとても驚いたのは、ブルーシートを被せている住宅の数です。私は、災害ボランティアに行くこと自体初めてで、地震から約5ヶ月経っている被災地が、現在どのような状態であるのかということをおぼろげにイメージできていませんでした。そのため、飛行機から見える住宅に数多くブルーシートが覆い被せてあることが驚きでした。ボランティアセンターに到着してからスタッフの方や現地の方にお話を聞いてみると、一部損壊の状態で生活している人などは雨漏りや風などを防ぐためにもブルーシートが必要であるということでした。しかも、ブルーシートを一度取り付けても長期的に耐えられる耐久性はないため、張り替えることも必要であり、そのような内容の活動も多いことも初めて知ることが出来ました。

今回のボランティア活動として、ボランティアセンターの運営側に携わらせていただいたことも、とても貴重な経験となりました。今まで私は、メディアでなんとなくボランティアの様子などを見てしまっていたのですが、ボランティアの人がスムーズに活動できるようにするためには、運営側が細かいところまでしっかり段取りを考えていて指揮を執ってくれたからなのだなと感じました。ピースボートのように組織で活動している人、地元外から長期でボランティアをしてくれている人、地元の社会福祉協議会の人など他にも多くの人の連携があって、一般ボランティアを受け入れられる体制になるのだなと感じました。そして、参加する側の一般ボランティアの方も運営側と連絡を密にとりながら、協力しながら活動していくことが大切だと思いました。また、運営側のお手伝いをしたことで難しさも感じました。多様化するボランティア活動の受け入れ方についてです。現在メインで行っている災害ボランティアとは別に、「子供たちが遊べる秘密基地を作りたい」「仮設住宅でヨガの教室を開きたい」など本当に多くの内容のオファーが来ます。しかし、すべての活動をボランティアセンターで運営していくことは困難です。色々な施設でうまく分担していくことが大切だけれども、なかなか現在はうまくできていないというお話をお聞きしました。そして、すべてのボランティア活動をすぐに受け入れるのではなく、細かいところまで把握したうえで、その活動が行えるのか判断していくことが大切だと教えていただきました。

6日間という短い間の活動でしたが、とても中身の濃い時間となりました。私自身初めて被災地に行ってみて、自分が思っていたよりも復興するには長期にわたり時間と労力が必要であることを身に染みて感じました。また、被災家屋における支援などの労働的な支援以外にも、被災者の気持ちを受け止めるような関わりなど、精神的なサポートを行っていくことも本当に大切なことであると、現地の人との触れ合いの中で感じました。看護職を目指すものとして、これからは精神的なサポートなどについても目を向けていきたいと思いました。震災から約5ヶ月経った時に、被災地の現状を見て、現地の人とふれあい、その場所の空気を自分で感じる事が出来たことは、本当に貴重な経験になりました。

【看護学科3年 市石 遼】

私は正式な手続きを踏んで行うボランティア活動が初めてであったため、今回ボランティアセンターに入ってどのようにニーズとボランティアのマッチングが行われているのか、ボランティアのセンターの必要性、運営の困難さなど知ることが多くあった。しかしその中でも、震災から5か月経過しているという状況にもかかわらずビニールシートが目立ち、倒壊した家屋も数多く見られる状態であるということに驚きを隠すことができなかつた。そのような状況にも関わらずボラセン自体を撤退して社協に移していくという現状にも初めは疑問を感じていたが、いつまでも外部の力で復興をしていくことは望ましくなく、西原村や熊本県の力で復興していかなくてはならないということが5日間の中で分かった。

ボランティア活動というと屋外での活動をイメージしていたため、引継ぎを受けて作業内容に戸惑いを感じたのは事実だが、今回のボランティア活動は他では体験できないことを多く学ばせていただく機会を得たと感じる。まず運営の裏側を見させていただいて、ニーズ一つ一つに対応していくためにはそのニーズの正確な把握はもちろん、ニーズに合った人材の確保（ボランティアを受け入れる人数や重機を使うことのできる人材の確保）などが必要であることを実感した。その中で、ボラセンを通してのボランティアにはボランティア保険の適用の関係上赤紙の家屋には入れないなど限界があるため、なかなか家屋の解体を進めていくことができないという現状があることも見えてきた。

西原村のたんぼぼハウスはNPOで障がい者や不登校など社会に馴染むことのできない人々の集いの場として開放されていて、震災の翌日から炊き出しや、その後も家屋の解体作業を行うことで復興支援をしてきたと説明していただいた。ボラセンで受けられないニーズもたんぼぼハウスでは受けることができる場合やその逆の場合もあるため、それぞれの施設、事業が協力して復興のために尽力しているのだと感じた。

西原村は阿蘇山の外輪であり、高齢者など第三者の介入が必要な方々が多くいることや、家屋の解体が追い付いておらず仮設で生活する人も少なくない現状があるということなどから、今後復興をさらに進めていくためにはボランティアが継続して活動していく必要がある。ボラセンは社協に統合されて今後縮小していくが、ボランティア活動は続けるよう募集を継続したり、現場を実際に見てきた私たちが必要性を発信していくことが重要なのではないかと感じた。

【看護学科3年 土井希実】

熊本県阿蘇郡西原村ボランティアセンターでの5日間

私にとって熊本県阿蘇郡西原村でのボランティアは、災害発生から回復までの道のりの難しさを知るとともに、協力し合う人々の素晴らしさを感じる機会となった。

私は専門学校時代に災害ボランティアに参加する機会があり東北地方の震災復興活動や地元広島県で起きた土砂災害時のボランティアにも参加した。何度か災害ボランティアの場へと赴いている理由としては、それぞれの現地に赴くこと出る魅力にどうしても触れたいと考えてしまうというのがある。

4月14日熊本地震。看護学校時代3年間クラスが一緒でとても仲良くしていた友達は熊本で就職してい

た彼女は看護師として患者を守る任務がありながらも自宅も1部破損し車中泊をする日最初の1人になってしまった。

看護学生ではなく看護師資格を持つ者として起きた震災。何かしたい、どうにか力になりたい、と考えてはいたが、その時の自分に現地に行くような技術力はなかった。看護師としてできる事は今の私に何も無い。ボランティアや災害看護の基本は自給自足。自身が経験を十分に持っておらず、経済力の無い学生で学力をおろそかにする状態での現地には不可能であったし何よりも何もできないことが歯がゆかった。

そんな中、熊本で余震があるたびに不安を漏らす友人とは欠かさずLINEをしていた。「熊本行くけんね。大丈夫。心はそばに居るけんね」。毎日毎日2ヶ月くらいはおはようとおやすみのラインをし続けた。専門学校時代にボランティア先で震災がなければ出会うことのなかった方に被災したことについて話を聞く経験は何度もあった。しかし、知っている誰かが被災したときにどう声をかければ良いのかと言う事は、コミュニケーションのプロフェッショナルを要求される看護師になった今でさえ、答えが見つからなかった。遠くにいて何もできないけど不安の様子や強がっている様子はSNSを通じて痛いほど伝わってきた。それでもいつも彼女に連絡を取るかどうか戸惑い、何と送れば良いか打っては消し打っては消し、慎重なコミュニケーションを取ろうと努力していたように思う。

夏休み、熊本にボランティアに行ける時間がやっとできた。どのように活動しようかどのように会いに行こうか考えている時、大学の学内メールで西原村ボランティアセンターでのボランティアのメールをいただいた。夏休み中の留学の後でもあったが、予定を調整して熊本行きを決めた。ボランティアしたいと言う思いはもちろん、被災前から知っている看護学校時代の友達に会いたいと言う思いもとても強かった。

飛行機で降り立った初めての熊本。ブルーシートが目立つ地域は穏やかな夏の終りと秋の始まりを感じさせる雄大な自然に囲まれていた。空気がおいしく、不覚にも少しワクワクしてしまった。

ボランティアセンターは村の中心部にある社会福祉協議会の施設の1部に設置されていた。飛行場からも近く、そこには村人が利用できる入浴施設やデイサービスも揃っており、村の中心部に福祉施設が集まっている、村ならではの体制であった。行政と住民が根強くつながっている印象を受け、地域密着型の福祉連携の様子が気になった。

早速、埼玉県立大学の学生から業務の申し送りを受け、いざボランティアセンターで作業を開始した。私たちのグループは最終グループに当たる。これまでの学生が受け継いできた役割やその責任を十分に果たしたい。そんな思いに駆られていた。これまで、ボランティアセンターでのサテライトで資材班を担当したり、現地に来たボランティアさんの送り出しやボランティア会議にも参加したこともあったので、とても張り切っていた。人見知りすることもなく、これまでのボランティアセンターとの違いを理解する前に、積極的に行動しようと意気込んでいた。

しかし、その積極性が裏目に出た。今回の現場での仕事は総務作業が主である。報告連絡相談が欠かせないし、自己判断することはとても危険なことであり、私の責任で物事を管理できる状態ではない。要するに慎重であるに越したことはない場だった。それにもかかわらずパソコン業務で効率を意識して良かれと思って押したボタン1つが、全体をストップさせてしまうことがあった。今回現場で行なった業務はウェブサイト上のソフトを操作するものであったため、私のミスがすべてのパソコンで共有されることになった。ミスを犯して初めて、「自分是可以する」とおごり高ぶっていたことに気がついた。ボラン

ティアで必要な事は、「私が何かする。してあげよう。」と言う自己主張ではなく、少しでも業務が円滑に回るように「みんなで協力し、秩序を守る」と言った協調性であることを思い、反省した。またミスをしてしまうと萎縮して行動が小さくなってしまうことによる失敗も見え隠れし、ミスの後の立ち直りの弱さも裏目に出てしまった。

自分が変わらなければ、誰も私を変える事はできないと自分に言い聞かせ、その日乗り越えたことが克明に脳裏に刻まれている。西原村でのボランティアとして、私は自己を見つめ直すことを教えてもらい、とても大きな経験になった。

西原村でのボランティア内容は、センターでの業務だけでなく、デイサービスでも活動させていただき、また地域のNPOでの活動も行った。看護師資格を持っている私は、デイサービスで「この方、不安定になりやすいからお話を聞いて差し上げて」とスタッフから指示を受けた。その女性はしきりに「帰りた。早く帰りた。」と繰り返していた。「今〇〇時なので、おやつを食べて帰りましょうね」「早くおうちに帰りたいですよね」などと声かけをするものの、その方は一向に安心されることがなかった。後で職員の方から「さっきの方は地震で以前の自宅には住めなくなったから今は仮設住宅で暮らしているの。でも地震から半年が経った今も昔の地震の前の家に帰りたと言うのよ。」と教えてくださった。地震後に認知能力の低下も著しくあったと言う。天災が引き起こす地元の人々の心に付けた大きな傷。その傷に苦しむ人を前に、ただなだめ、話をよく聞くことしかできない自分に憤りを感じた。あの方の気を紛らわせるように関わることはできたとしても、帰りたと言う欲求を充足させることはできない。このジレンマをどうすれば乗り越えられることができるのか、まだまだ勉強が必要だと感じた。

5日間のボランティアの間には穏やかな気持ちになることもたくさんあった。「ネットが使えないけどボランティアがしたいと」電話してきた男性の電話をボランティアセンターで取り、ボランティアの受付をしたこともある。「これを持って帰って食べて」と声をかけて下さった地域の方。毎日顔を合わせるようになり、少しずつ会話をした長期ボランティアさんの笑顔。何かしたいと全国から集まる方の中に、以前広島で出会ったボランティアさんもいらっしやっ。「広島が水害にあったときに手伝ってもらったんじゃけえ、恩返しをせんといけん。来てもらうた人から教えてもらうたんじゃ。どっかで災害あったら行ってあげるのが恩返しになるんよ、ゆ一て。」。ボランティアを通してまた出会えることにとっても心が熱くなった。

5日間のボランティアを終えた次の日、私は看護学校時代の彼女の家に泊まりに行った。「お風呂きれいになったたい。会いたかったばい。」と笑顔で話す彼女を見て私が元気をもらった。

いつどこで起きるか誰が巻き込まれるかわからない震災。避けては通れない天災の前に、防げるだけ防ぐこと。できる限りの知識をつけること。過去の震災から学びを得ること。今できる事はたくさんある。看護職者として、1人の医療人として、震災に遭った人を看護することや、震災にあった人に医療を提供することをすることは容易に考えられる。資格を持っていても簡単に看護はできないし、どう声をかければいいのかもわからない時がある。今、学生だからこそ、現地に行くことができるし、知らないことを恥ずかしがらず学ぶことができる。人々が助け合う様子を垣間見て、体感して、私はまた少しだけなりたい理想の看護師に近づいてきた気がする。

西原村ありがとう。きっとまたいつか懐かしい未来を取り戻した西原村に遊びに行きます。

プロジェクトSPU in熊本県阿蘇郡西原村



看護学科3年	市石 遼	社会福祉子ども学科1年	川上 藍美
	土井 希実	2年	東 憧夢
	田澤 志帆	3年	深谷 江里
			川口 絢子

目次

1. 熊本県と熊本地震の概要
2. 災害時のボランティアセンターの立ち上がりと役割
3. ボランティアでの活動内容
 - ボランティアセンター
 - 二次予防事業対象者対応サービス 西原すみれの会
 - 西原村社会福祉協議会 デイサービス
 - NPO法人にはらたんぼほハウス
4. 番外編・西原村社会福祉協議会の方のお話から
5. なぜ、保健医療福祉の学生が被災地へ赴いたのか



熊本県



- 場所：九州地方中央に位置
- 人口：1,775,337人 (H28年10月1日現在)
- 有名どころ：阿蘇山・くまもん

西原村

- 人口：6862人 (H28年10月31日現在)
- 世帯数：2568世帯
- 熊本空港から比較的近い
- 阿蘇山外輪に位置する
- 小学校2つ、中学校1つ
- 河原村と西原村が昭和35年に合併し、西原村となる



熊本県と熊本地震の概要



熊本地震

発生：前震；4月14日21時26分

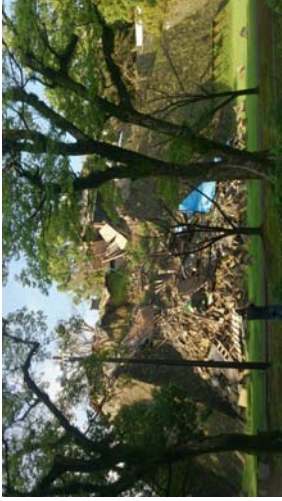
本震；4月16日1時25分

震央：熊本県熊本地方

震源の深さ：12km

マグニチュード：7.3

震度7を観測した地域：益城町・西原

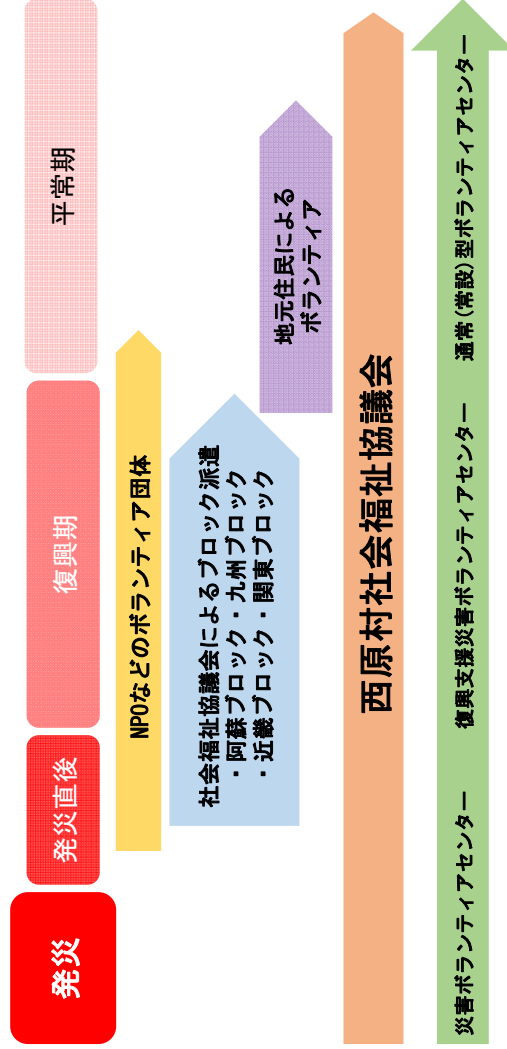


- ・14日に発生したものを上回る地震の発生は想定されていなかった。
- ・火を使用する時間帯を避けた発生だった。
- ・建ててから時間のたっていない新築の家屋は倒壊せず、比較的古い家屋の倒壊が目立った。
- ・熊本は農家が多く、納屋の倒壊なども多かった。

災害時のボランティアセンターの立ち上がりと役割



災害時のボランティアセンターの過程



災害時のボランティアセンターの役割

- ・総務班
 - …センター運営・連絡調整・情報発信・資金管理など
- ・ボランティア受付班
 - …ボランティアの受付・問い合わせ対応など
- ・ニーズ・マッチング班
 - …ニーズの把握・現地調査・活動当日のオリエンテーションなど
- ・資材班
 - …資機材の貸し出し・管理など
- ・送迎班
 - …ボランティアにきた方を活動場所まで送迎・車両の手配など



処分物の整理



倉庫の様子



ボランティアでの活動内容



- ボランティアセンター
- 二次予防事業対象者対応デザイナーサービス 西原すみれの会
- 西原村社会福祉協議会 デイサーサービス
- NPO法人にしはらたんぼぽハウス

ボランティアセンター(平日)

- 平日はニーズの受付、現地調査などが主な仕事。

① ニーズの受付

ボランティアへの依頼が災害ボランティアセンターに集まる。(電話で受け付け)

② 現地調査

依頼されたニーズをもとに、実際に現場の調査。(必要な人数・物資の把握、どのような危険があるかなど)



データの整理



連絡業務中

ボランティアセンター(休日)

- 休日は全国各地からボランティアの方々が活動しに来る。
 - 当日朝は警備。
- 多くのボランティアが車で来るので、安全の確保やスムーズな活動ができるように誘導・案内。

- 全員集合したら、ボランティア活動をするにあたっての注意事項・厳守事項の説明。

➡いくつかのグループに分かれて活動場所に向かう。



送り出し業務

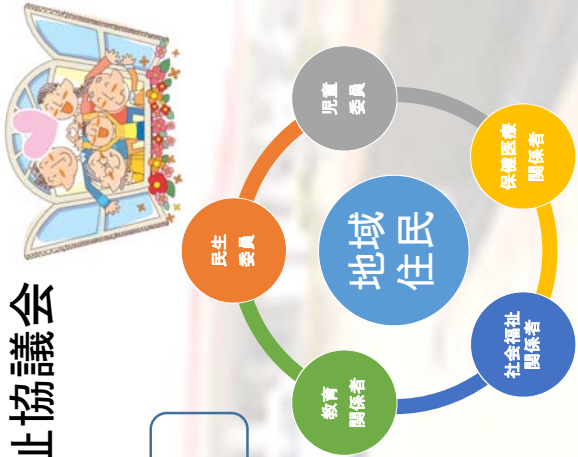
ここで紹介！西原村社会福祉協議会

☞ 社会福祉協議会とは…？

民間の社会福祉活動を推進することを目的とした
営利を目的としない民間組織



「社会全体で福祉のことを協議する会」
「みんなので、みんなの幸せ（安心して暮らせること）について、話し合い、みんなが協力しながら、それを進めていく会」



災害ボラの傍ら…こんな貴重な経験も！ ☞ 西原村社会福祉協議会には…

- ① 地域福祉全般事業
(高齢者、障がい者、児童・青少年、住民全般、子育て支援)
- ② 総合相談(のぎくふれあい相談センター)
- ③ 介護保険関連事業
居宅介護支援事業・訪問介護事業・通所介護事業・地域支援事業
- ④ 通所型介護予防事業 (特定・準特定高齢者)
- ⑤ 軽度生活援助事業 (特定高齢者訪問介護)
- ⑥ 家族介護支援事業 (在宅介護者)
- ⑦ 介護予防コーディネイサーサービス
- ⑧ 障がい者(児)デイサービス (身体・知的・精神)
- ⑨ 生活福祉資金貸付事業
- ⑩ 地域福祉権利擁護事業
- ⑪ 日本赤十字社関連事業
- ⑫ 共同募金関連事業
- ⑬ 地域福祉センター管理運営

通所
介護事業

通所型
介護予防事業



通所介護事業

☞ 通所介護事業とは…？

利用者が自宅で自立した日常生活を送ることができるよう、
自宅にこもりきりの利用者の孤立感の解消や
心身機能の維持、家族の介護の負担軽減などを目的としたサービス
※介護保険の被保険者が適用です！

市町村が介護が必要であると認めた40歳以上の
介護保険加入者に対して行うサービス



SPU学生の1日デザイナーサービス体験

8:00	ミーティング、送迎
9:00	健康チェック
9:30	転倒予防体操、 手洗いうがい・水分補給 生きがい活動
11:20	けんこう体操
11:30	配膳、昼食介助
12:15	歯磨き
12:30	お昼休み
13:30	入浴介助
14:30	レクリエーション
15:30	おやつ配膳
16:15	送迎



体験で学んだこと

帰りたいたい、はようちに帰りたい

- 意味：震災前の家に帰りたい
 - 災害が住民にもたらす精神的不安を実感
 - 医療者としてできること
- 「目線を合わせて、
あなたの話を一生懸命聞きますよ」
というメッセージを伝えること。



通所型介護予防事業 二次予防事業対象者対応デイサービス西原すみれの会

通所型介護予防事業「西原すみれの会」は、利用者さんが介護保険へ移行しないよう運動機能の向上、認知症予防、生きがい作りなど様々な活動を行っている。

週一回開かれていたが、希望者が増えたため、10月からは週2回になった。

通所型介護予防事業

8:00	ミーティング、送迎
9:00	利用者さん到着
11:30	昼食
12:30	お昼休憩
13:30	お出かけ
16:15	ひまわり畑 100均でお買い物 送迎

体操、趣味活動
腕や足の曲げ伸ばしや、ボールを使用した運動

配膳は利用者さんが協力して行っていた。



1日参加してみても

10数人の利用者さんに対して、室内では職員さん1人、外出時は2人に対応していた。

→ケアをすすめる職員さんが少ない

利用者さんはともにお元気で、様々なお話をしてくださった。方言を教えてくださいただきながら、地域のことや、健康法などを聞くことができた。

NPO法人にしはらたんぽぽハウス

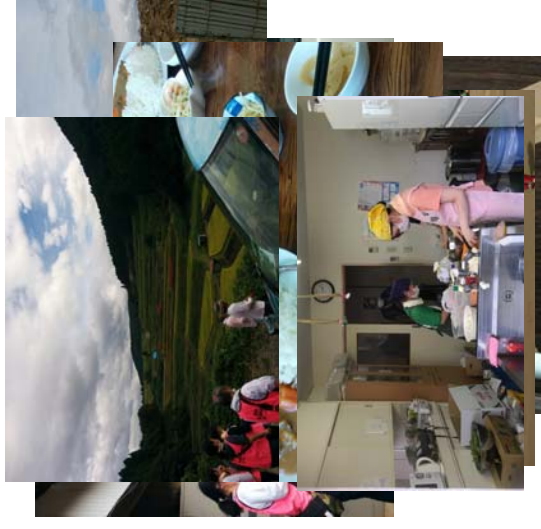
☞ NPO法人にしはらたんぽぽハウスとは・・・？

地域の障害者や子どもに向けた就労支援や農作業体験を行っている、震災前から西原村で活動する非営利団体



震災後：
地元の人から受けた災害復旧活動を
日本全国から来たボランティアに紹介し
地域とボランティアをつなぐ役割

SPU学生の1日たんぽぽハウス体験



9:00	たんぽぽハウス到着 星田地区の赤紙のおうち から量の運びだし
11:30	集積場見学
12:00	カレーをいただきました
13:00	小豆畑の草取り、 自主製品の製造お手伝い

地元社協の方のご自宅にて①

○社協職員の方々

- 自身も被災者
- 地震への不安感
- 身体的・精神的負担

○ボランティア

- マンパワー (物理的な支援・効率)
- 継続的な協力体制 (安心感・心の支え)



西原村社会福祉協議会の方のお話から

地元社協の方のご自宅にて②

地震発生時・・・

○住民同士の協力

- 迅速な救助活動
- 避難場所・必要物資の確保
- 情報共有

普段からの**地域のつながり**の重要性

プロジェクトSPU
 い熊本県阿蘇郡西原村に参加して

保健医療福祉の対象はだれか すべての人

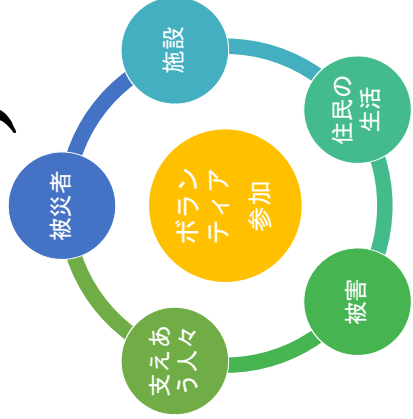


表3 災害サイクルに応じた看護師の役割

災害サイクル	主な看護職の役割・仕事
急性期 (発生～3日)	①受け入れ態勢の準備、②気道確保や血管確保など中等症～重症者に対する初期治療、③重症者に対する術後ケアや手術後の観察など、④高齢者の身体的な観察、⑤患者さん、家族への支援、⑥病室状況の把握、⑦一般市民への健康と病気の状態の相談、⑧死者への関わりと遺体安置所への搬送および条件の管理、⑨医薬品、衛生材料、食料（医師者の食料も含む）など
亜急性期 (1～6か月)	①災害者、障害のある人、子どもなどに対する、精神的なケアへの対応、②③回復治療、④慢性疾患患者さんへの相談、⑤機体・身体機能の回復・指導、⑥感染症の予防、など
慢性期 (2～3年)	①慢性疾患、高齢症、慢性呼吸不全、上気道感染症などに対する看護、②心のケア
評価期 (3年以上)	被災に備えての行動化

なぜ私たちは、
 “保健医療福祉の学生として”
 被災地へ赴いたのか

苦しむ人を見捨てることはできない

今だからこそ学べた人のこと、災害のこと、福祉のこと

支え合う素晴らしさ、支え合う難しさ

自分が未熟なことに気づくことができた貴重な時間

保健医療福祉とは切っても切り離せない災害

被災地に行かなかったら
出逢えなかった人がいる

被災地に行かなかったら
知らなかった景色がある

被災地に行かなかったら
学べなかった事実がある

ありがとう西原村

